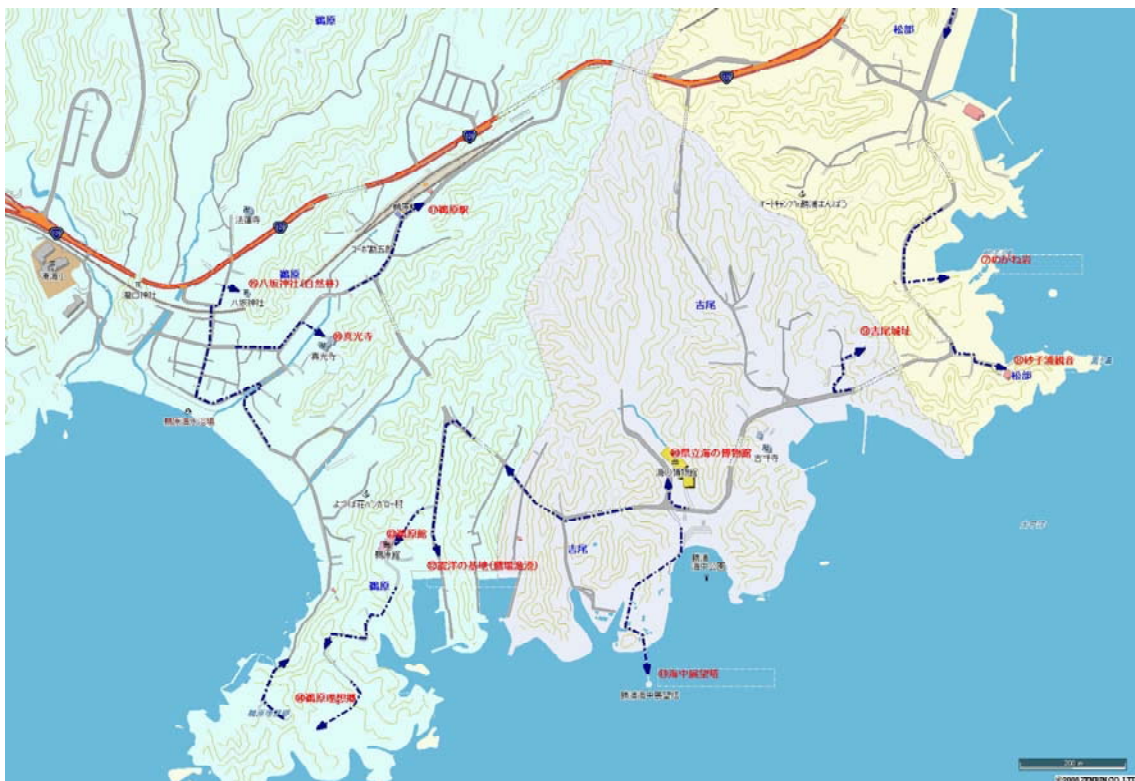
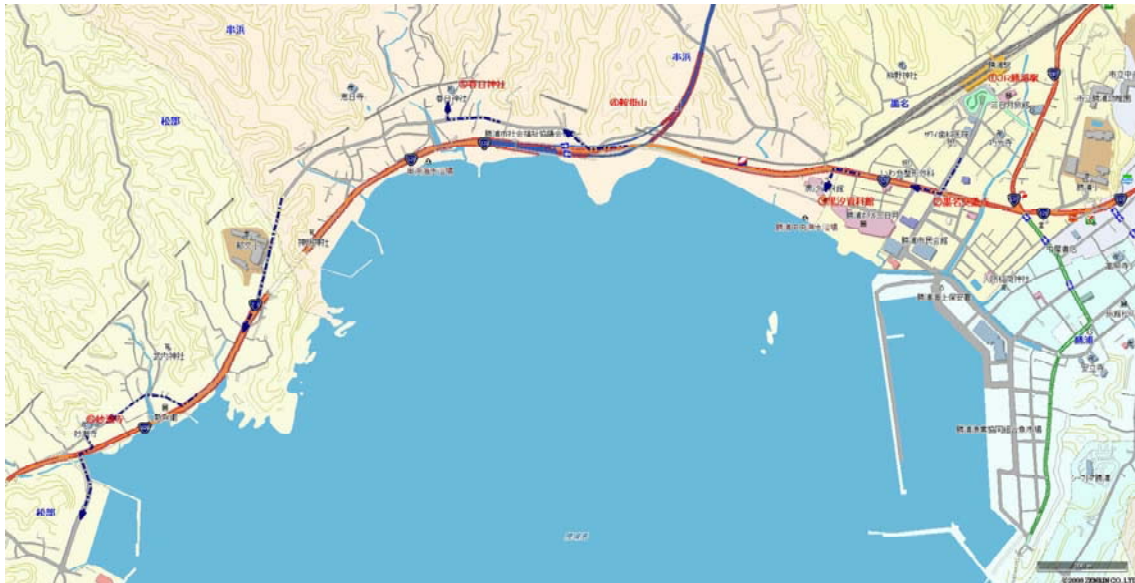


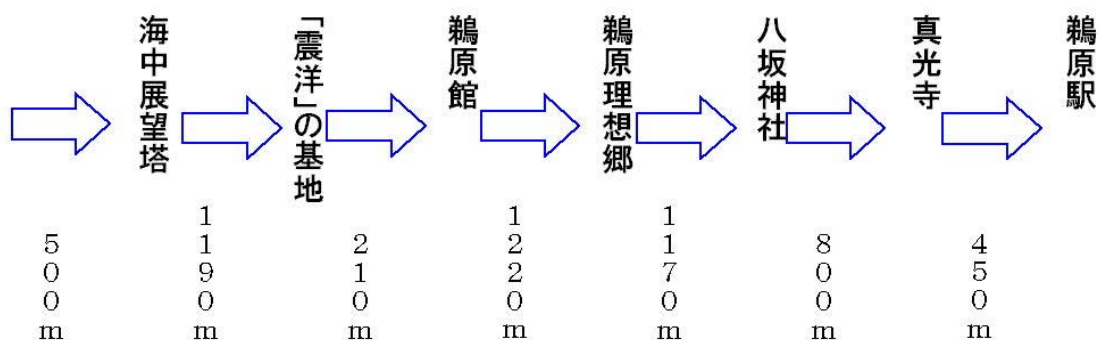
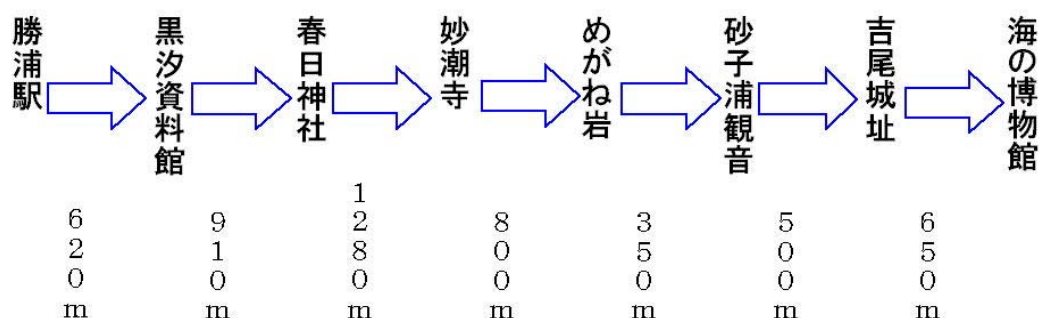
尾名浦・理想郷コース

源頼朝伝説の鞍掛山(頼朝が馬の鞍を掛けて休んだという伝承がある)を右に見て、左に勝浦湾を見ながら、めがね岩・理想郷等の景勝地と海の博物館等の施設や文化財をめぐるコースです。

経路図



コースの経路(10.0km)



【経路説明】

① JR勝浦駅を出、三日月旅館の前の歩道を横断し、海岸方面に進むと②墨名交差点に出る。ここを右折し、国道128号線を行く。左に臨海荘が見えてくる。この臨海荘内に③黒汐資料館がある。

※本資料館には漁村の民具や漁具、万祝などが展示され、漁村の生活史を知ることができる。(入館料200円)

更に国道を進むと陸橋が見えてくる。その上に見える右手の山が④鞍掛山である。陸橋の下に信号機のある交差点を右斜め前に進む。国道に並列している串浜の旧道である。勝浦市社会福祉協議会センターの過ぎたところに春日神社入り口がある。右折し⑤春日神社に行く。

※かつて、俳人の碧梧桐氏がこの地で「鯛や 松あらあらの 一漁村」という句を詠んだという。

もとの旧道を進むとトンネルがあり、郁文小学校入り口がある。更に行くともとの旧道に入る(右折する)。100mほど進むと右手に寺院が見える。⑥妙潮寺である。また、少し行くと国道に出る。少し引き返し、手押し信号機のあるところで国道を横断する。左に松部漁港が見えてくる。更に前進し二つのトンネルをぬけると砂子の浦にでる。勝浦湾屈指の景観⑦めがね岩である。そこから350mほど進み、海沿いに左折する。⑧砂子浦観音がある。トンネルを過ぎ、左に海が見えだしたところで人家の間の細い道を右折し、少し行って更に右折し山に入って行く。そこら⑨吉尾城址である。またもとの道に出、650mほど行くと右手に近代的な建物が見え

る。⑩海の博物館である。その博物館の海側に⑪海中展望塔がある。また、元の道に出、トンネルを三つ過ぎたところで左折し、海沿いに進むと入江に漁港がある。⑫勝場港である。

※この勝場港付近には、太平洋戦争時代に作られた水上特攻艇「震洋」に基地跡がある。

勝場港の入口には鶴原館の駐車場があり、坂道が鶴原館に続く。よく文人が訪れた⑬鶴原館がある。鶴原館の前を進み、620mほど行く。⑭鶴原理想郷の絶景が眼に飛び込んでくる。理想郷のハイキング道を反対側に下り、トンネルを抜け、海沿いを進む。小さな橋を渡り、海沿いに進み、鶴原青年会館の所を右折し、JR外房線の下をくぐり、少し行くと右側に県記録選択文化財の大名行列で有名な⑮八坂神社がある。

※八坂神社の自然林は県指定天然記念物である。

元来た道を引き返し、前の橋の戻らないで進むと右に紀州漁民移住者の墓がある⑯真光寺である。ここから450mほど進むと⑰JR鶴原駅である。

※勝浦市民会館近くの市営駐車場に車をとめ、③から⑯と進み、JR鶴原駅→JR勝浦駅から①、②と来て、市営駐車場に戻ることもできる。

コースの見所

① 黒汐資料館(臨海荘内)

先代館長・矢代嘉春氏のコレクション。創立昭和四十八年(1973年)十月。

主な展示内容：漁村生活の中で愛用されていた美しい民具の数々。旧網元の家再現。万祝コーナー。漁民用具コーナー。漁村信仰コーナー。日本の鯨コーナー。和船模型コーナー。船大工用具コーナー。和船の部材コーナー。ほしか製造装置コーナー。タコ絵馬コーナー。漁民の伝統漁具コーナー。・・・などからなり漁民や漁村の生活史を学ぶことができる。

開館時間は 午前10時～午後5時

入館料は 大人：200円 中・高校生：100円

※黒汐資料館のホームページ www.rinkaisou.com を参照ください。



② 鞍掛山

この写真の右に見えるのが鞍掛山である。この鞍掛山には源頼朝がこのところに来て、しばし鞍馬を松の木陰に休めたと言う伝承がある。また、俳人の碧梧桐がこの地で「蝸や 里人知らぬ 崖くづれ」と句を詠んだという。勝浦案内 ※今は訪れる人もなく、草深い小道が山に続くのみ。



頼朝伝説

ここ上総の地に源頼朝が通過したという史実は発見されていない。しかし、多くの頼朝伝説が存在する。それは、鎌倉時代初頭まで凡そ二百五十年にわたって、戦乱が続き、民衆の生活が逼迫していたこと。その終焉と同時に、民衆を安堵させる布達を次々出したことがこうした伝説を生んだのであろうか。**夷隅風土記**

ここ勝浦には、「枕石」の話：船で来た頼朝が勝浦湾内の平島の枕の形をした石で寝、一夜を明かした。その枕石は八幡神社境内にあった。「佐野の四っ石」：石橋山の戦いに破れた頼朝がこの地で追っ手の急襲に逢い、馬をおどらせながら川中に飛び込んだ。すると、川底から巨岩がせり上がり、無事渡河ができた・・・等の伝説がある。

※佐野：勝浦市佐野

③ 春日神社

祭神は天児屋根命。

※天児屋根命：中臣氏の祖。日本神話では、岩戸隠れの際、岩戸の前で祝詞を唱え、天照大神が少し岩戸を開いたときに太玉命とともに鏡を差し出した。天孫降臨の際ニニギに随伴したとされる。

「曾て。碧梧桐氏。一笠双鞋。房州より来り。此地を過ぐるや。遙かに。翠の松の影浸す。新月彎の畔に迷ふ。暮雲を望みて句あり。 蝸や 松あらあらの 一漁村」**勝浦案内**
この春日神社の秋祭りでは、御神輿を高くさし、その下を大勢の善男善女が三回ほどくぐる。「胎内くぐり」といい、無病息災を祈るといふ。

この地域は「串浜」という地名で、江戸中期まで櫛浜と書かれていた。「昔、平家一族で、この村を知行した家に生まれた"理性"という女性が、考えることがあって、櫛を捨て出家した」のでその名がついたという伝承がある。

※浜の形が弓型で、弓に似ているところからついたという説もある。**夷隅風土記**



④ 妙潮寺

日蓮宗。開基は日教。創建は真言宗見潮寺として、至徳元年（1384年）と言われている。応永三十一年（1424年）日教によって日蓮宗に改宗。海岸山妙潮寺と改名する。



上総五十座

天文十九年（1550年）池上本門寺の日現上人が祖師堂の復興、妙法広布のために勝浦の本行寺で二百余日の布教を行い、後にその遺志を継いだ日愷上人が再び、本行寺で一日一座で五十日間行った。これが上総五十座説法の始まりとされて、四百年余を過ぎた現在も、妙潮寺を含めた勝浦市の七つの日蓮宗寺院の輪番で凡そ一週間行っているそうである。

この地域「松部」は、良港があり、豊漁の漁船や暴風雨の際に帰船を待ったりすることから「待つ辺」といい、松部となったという説がある。

大正時代まで、この辺りで切り出す石を「松部石」といい、土建等で用いられていた。

⑤ めがね岩(砂子ノ浦)

風光明媚で気候にも恵まれた勝浦は観光地としての好条件を備えていた。いつの頃からか勝浦のすぐれた風景を数え上げて、勝浦八景と呼ばれるようになった。

明神山の青嵐、浜勝浦の夕照、出水の落雁、覚翁寺の晩鐘、庚申山の秋月、串浜の夜雨、砂子ノ浦の暮雪、松部の帰帆

※明神山：遠見岬神社のある山域 庚申山：今の勝浦小学校のある山域

ここ「めがね岩」のある砂子ノ浦から見る勝浦湾は一見に値する。勝浦を訪れたら是非ご覧いただきたい一つである。



⑥ 砂子浦(さごのうら)観音堂

かつて普門庵といった。砂子ノ浦の南端にあり、すぐ前が海である。本尊は聖観世音菩薩（木造立像・金箔）。普門庵の住職であった日禎上人が正徳三年（1713年）八月十五日の夜、明月を賞しつつ月天子に読経の折、海中に光るものを見、翌朝漁士に依頼して網を打って引き上げてみると、香り高い五尺有余の古木がかかる。上人はこの霊木を持って正徳四年九月に上京して、当時の大仏師「林如水法橋」に観世音菩薩の尊像を彫刻せしめ、その間上人は法橋の室にあつて観音経を読誦し、完成を持って尊像を持ち帰り、お堂に奉安せられた。大慈大悲の観音様として功德甚大と近郷近在の人々から尊崇されている。一名厄除け観音という。普門庵由来より

享保九年（1724年）修理という銘がある。

※日禎上人：勝浦市大楠の出。誕生寺貫主をつとめた後、隠居してこの地に庵を建てた。また、槍の名手でもあったという。



この観音堂には、太平洋戦争末期の対米艦隊用の水上特攻艇「震洋」の模型が奉納されている。

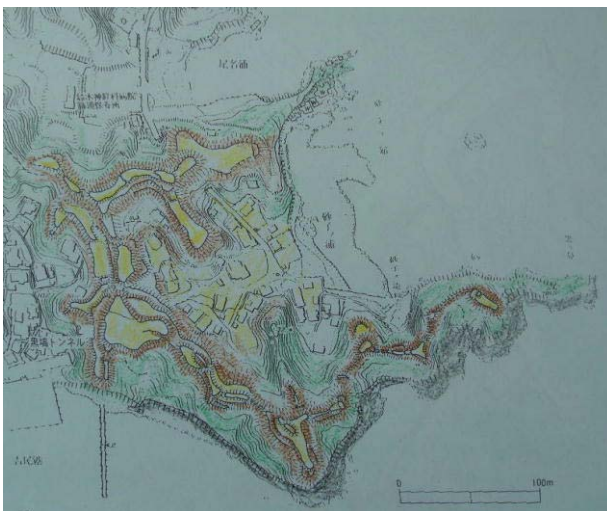
⑦ 吉尾城址

勝浦湾の八幡岬の反対側にある半島にあった。「興津城の一分堡たり、天文六年（1537年）正木時忠のために攻畧せらる」**夷隅郡誌**

※正木時忠：勝浦城主。里見の武将であった。

正木氏以前に築かれたととれるが、確かな資料はない。永禄～天正の頃（1560～1590年頃）は正木氏の重要拠点として機能していたと考えられ、天正八年（1580年）七月大多喜城主正木憲時が里見に反旗をひるがえした憲時の乱に当たり、憲時が吉尾城を目標としたのもそれ故であろう。秀吉の小田原征討時に関東諸城を書き上げた「関東八州諸城覚書」に正木頼忠の抱え城として「よしうの城」とある。勝浦正木氏の城としては、勝浦と吉尾のみであるから、その最末期の勝浦正木氏の有力な属城として位置づけられていたと考えられる。戦国末期に勝浦正木氏が勝浦湾を押さえる一方の湊城として整備したことは確かであろう。

写真は今も残る掘り割りの一部である。



「吉尾城跡縄張図」

⑧ 海の博物館（千葉県立中央博物館分館）

海の博物館は自然を体験し学習する施設として、平成11年3月にオープン。展示室・研修室・ロビーが自由に見学できる。

展示室には「房総の海」「さまざまな海の姿」「博物館をとりまく自然」「海と遊ぼう」の4コーナーがある。※定期的に一部の展示が交換される。

研修室では、海の生きものを紹介した映像「マリタイムシネマ」の上映を行っている。また、毎年一回、海の自然に関する企画展示「マリンサイエンスギャラリー」を開催している。

ロビーでは、中庭に展示されたツチクジラの骨格が見学できる。

自然観察エリア：博物館周辺の自然も学習活動の場と考え、周辺の湾や岬等を活用した観察会や探検隊などの行事を行っている。 休館日：毎週月曜日（月曜日が休日の時は翌日）

入館料： 一般＝200円、高校生・大学生＝100円 中学生以下・65歳以上・障害者等＝無料 団体割引がある。



⑨ 海中展望塔

この海中展望塔のある鵜原地先は寒流と暖流の接点にあり、海の生物が豊富である。この一帯14.5haの勝浦海中公園の中央部に東洋一の規模の海中展望塔（高さ22.4m、水深8m）がたっている。

海中展望塔は海の中を直接覗くことができる自然観賞館。周りに集まってくる主な魚たちは、アジとかイシダイなどの他、サメ、ソラスズメダイ、メバル、ボラ、アワビ、イセエビ、サザエ、ナマコ、ヘビギンポ等々珍しい魚類にであえるかも。

年中無休（荒天の場合閉館することもある。） 開館9：00～17：00

入場料：大人（高校生以上） 930円 中人（小・中学生） 460円 小人（4才以上の幼児） 200円 団体割引がある。

⑩ 震洋の基地

砂子浦観音には田中さんという方が奉納した「震洋」の模型が置かれている。

この震洋とは、九十九里浜に上陸が予想された米軍を側面から攻撃し、首都を防衛する作戦で配置された水上特攻兵器である。

※震洋：乗員一名の一型と、乗員二名の五型があった。この特攻艇は、艇首に250kgの爆装をし、自動車エンジンを搭載した木造合板型（ベニヤ板）の高速ボートで、敵の揚陸部隊が上陸点に進入する前後に、夜暗に乗り集団をもって奇襲し、体当たり攻撃により船舶を撃沈するものであった。水上特攻艇は、飛行機を断念、必死の志願をした者に与えられた、「必殺の兵器」だった。「震洋」という名称は、明治維新の軍艦の名から採用した。また一説には、「敵艦を撃沈して太平洋を震撼させる」という意味があるそうだ。

ここ勝浦市では、尾名浦・砂子浦・鵜原・守谷などに震洋の基地が作られ、震洋隊が配備された。その数は79艘で隊員約400名であった。艇は海岸の崖に壕（ごう）を約30m掘り、4艇ずつ格納した。地下指揮所はトンネル中央部に横穴を掘って設けた。



この震洋は実際には使われることなく敗戦を向かえた。田中さんは元震洋隊員で、人間兵器震洋について「二度とごめんだ。」との思いから震洋の模型を奉納したという。 **「平成3年7月31日朝日新聞」**

⑪ 鵜原館

風光明媚で気候に恵まれた勝浦の地には古来多くの文人が訪れた。正岡子規、夏目漱石、芥川龍之介、鈴木三重吉、佐々木信綱、徳富蘆花、川端康成等々である。

この地を「鵜原理想郷」と命名し、開発を計画したのは後藤杉久氏であった。また、後藤末光氏が旅館事業を継承した。

その鵜原館にも多くの文化人が訪れている。杉村広太郎（ジャーナリスト）がこの鵜原館を訪れたのは大正十一年（1922年）であった。大正十四年には柳田国男（民俗学者）が宿泊している。与謝野晶子もこの鵜原館を愛好していた一人である。当時十二歳であった三島由紀夫は、昭和十二年この鵜原で一夏を過ごした。（鵜原館にも足を運んでいる。）画家の安井曾太郎と伊東深水もここに宿泊し、「鵜原風景」（昭和10年作）は安井の代表作のひとつと言われている。

※この鵜原館には「資料館」として展示ギャラリーに文学や絵画、理想郷開拓の資料が展示されている。



⑫ 鵜原理想郷

※写真は「ひとつやま」と呼ばれる切り立った小島。



理想郷は周囲凡そ2kmの太平洋の荒波に浸食されたリアス式海岸。深い入り江を覆うように木々や海岸性の植物が、紺碧の海に突き出た岬の先端まで茂り合っていて、素晴らしい自然造形を見ることができる。

この中は、遊歩道が整備されていて、眼下に煌めく海の輝き、柔らかな潮風の心地よさ、四季折々の花を咲かせる植物、時折聞こえる小鳥の囀りを楽しむことができる。

19ヶ所に「道標」と「注意標」が設置され、楕円柱型の道標の両脇には、与謝野晶子の詠んだ歌が刻まれている。

名勝ポイントは、「手弱女平（たおやめだいら）」「毛戸岬」「白鳳岬」「黄昏の丘」「ひとつやま」「勝場港」などである。

名勝ポイントには、四阿（あずまや）、鐘付きデザインベンチなどが設置されている。手弱女平の近くに、この地を詠んだ篠田悌二郎の句碑「崎山に 千草の平ら 虫の原」がある。

⑬ 八坂神社の自然林 県指定天然記念物

社殿裏山、高さ約30m、タブノキ、オオバグミ、エノキ、ヒサカキなどの巨木が頑丈に特殊な枝振りを広げ、その枝にテイカカツラ、フウトウカズラが絡み付き奇観を与えている。頂上には不動尊の小祠があり、周辺にはススキ、アズマササなどが生えていて人為も加わっているが自然林の状態は概ね保たれている。

植生は東西で異なるが、総体的には、第一層（高木層）、第二層（亜高木層）、第三層（低木層）、第四層（林床層）と森林構層がよく観察されることは県下の自然林としては貴重な存在である。



⑭ 鵜原の大名行列 県記録選択無形民俗文化財

毎年七月の第四土曜日に行われる八坂神社の例祭。行列は、若衆頭、挟箱、大鳥毛、陣笠、黒沙熊、白沙熊、若衆頭、中鳥毛、新白沙毛、新鳥毛、枝槍、槍、槍組、弓組、鉾組、薙刀組、鉄砲組若衆頭、神輿の順に続く華やかな行列で県下に類例は少ない。行列の式具は、大多喜城主本多忠朝から拝領したもの。古来の悪霊送りの行列が年を経て大名行列風に形を変えて伝承されたと思われる。



⑮ 真光寺と紀州漁民

天正十一年（1583年）西本願寺十一世顕如上人の弟子、西光法師は九人の門徒と共に紀州湯浅から阿弥陀如来尊影一軸を持って鵜原に逃れ、その後真光寺のもととなる庵を開いた。※織田信長の石山本願寺焼き討ちに端を発し逃れてきた。九人の門徒の中で、鵜原に四人、勝浦二人、部原一人が分住し漁猟に生業すと言う。

また、勝浦市川津の矢の浦に紀州加太浦の漁民が進出したという記録がある。（1596～1623年頃）彼らの房総方面への進出は漁場の開拓や干鰯などの漁獲物取引のため「旅網」ということで領主の許可を得、出漁していた。

漁業先進地の紀州漁民が房州の漁業の革新に果たした役割は大きく、その発端としての真光寺の由来は貴重である。

なお、真光寺の境内には紀州漁民移住者の墓がある。

